

図書紹介

Keith Buchanan. *The Southeast Asian World, an Introductory Essay*. London: G. Bell and Sons, Ltd., 1967. 176 pp.

イギリスは伝統的に地理学、とくに地誌に強い。本書はこの伝統をふまえた東南アジアの地理学的概説である。東南アジアをいかなる側面から研究するにせよ、地理にかんする常識をもっておくことは大切である。この意味で本書はとくに注目に値する。

ブキャナン教授は1953年いらいニュージーランドの Victoria University of Wellington の地理学教授である。それまで数年にわたりナイジェリアの University of Natal, University College, Ibadan で教鞭をとるとともにアフリカの現地調査に従事、ニュージーランドに移ってから東南アジアの調査を行なったのであり、低開発国地理についての現在指導的な研究者のひとりである。

本書の章をおって内容をごく簡単に紹介する。第1章は東南アジアの特質であって、著者はこの地域を Under-developed というよりむしろ Pre-developed としてとらえたいという。第2章は東南アジア研究者がよく指摘する「統一における多様性 (diversity in unity)」を歴史的に把握する。第3章は自然的基礎であって、地質地形構造・気候・生態などを明らかにする。第4章は食糧農業、第5章は農民生活を取りあげる。転じて第6章では東南アジアとヨーロッパとの政治的経済的一体化を取りあげ、プランテーション農業はここで取り扱われる。第7章は人口問題で、とくに人口の分布と増加率が問題になる。第8章は戦後の独立にともなう新興国の形成全般が、ついで第9章では各国別の国家形成が論ぜられる。最後の第10章は将来の展望であって、著者のきわめて楽観的な見とおしが結論となる。

著者が本書に An Introductory Essay とサブタイトルをつけているように、いずれは Fisher 教授の東南アジア地誌のような大冊を書きあげるつもりかも知れない。Fisher 教授の大著はもちろん現在の東南アジア地誌として最高のものであるが、その大冊のゆえになかなか通読しがたい。それにくら

べると、本書はきわめてハンディである。その意味で入門書として広く推薦したい。(本岡 武)

Michael Moerman. *Agricultural Change and Peasant Choice in a Thai Village*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1968. 227+vii pp.

University of California, Los Angeles の文化人類学科に現在勤務する著者 Moerman 博士が、1959-61年、北タイの Chiengrai 県 Ban Ping に定着調査をし、さらに1965年補足調査を行なったが、その成果が本書である。

本書の題目がそのまま示すように、この Ban Ping において農業、とくに水田作農業がいかに変革しつつあるか、また農民が変革にさいしいかなる選択を行なったかを主題とする。

本書の構成を紹介しよう。第1部背景として、第1章では Chiengham 郡と Ban Ping の概要とそこに住む Lue 人の過去。第2章ではその問題としての農業と農民のありかたを把握する。第2部は農業を第3章のプラウ農業と第4章のトラクター農業とに分け、その技術と村落外部関係とを詳論する。第3部は資源としての土地と労働とを取りあげ、第5章は土地の入手、第6章は労働移動とを、同じく技術と村落外部関係の2点から分析する。第7章は農業方式の選択、第8章は農業方式の変革であり、この両章に著者の重点が注がれている。なお付録として、モチ米についてのノート、量的データの入手過程と比較が掲げられている。

本書の特徴として、つぎの3点が指摘できる。第1はプラウ(スキ)耕の農業方式からトラクター耕へのそれが、このようなタイの北端部で生じている事実である。まったく画期的なことであるが、本書においてはじめてこれが本格的に分析されたのである。きわめて原始的伝統的農業へトラクターが持ちこまれた理由こそ、低開発国農業開発の立場からしても、重大な注意が払われなければならない。第2は、この農業方式変革を取り入れる農民の選択であ

る。農民の経済行動の分析は、またひじょうな注目に値しよう。第3は、そのさいの村落外部条件の作用の仕方である。こうした自給自足を主とする村落経済にさえ外部条件がいかに強烈に作用するかは、こんごの開発政策に重要な示唆を与えるであろう。

農業開発論の視点からの私の紹介は、文化人類学者のそれとは異なるであろう。文化人類学の立場からいって、本書はアジアの水稲栽培についての最も詳細な記述のひとつであろうし、また Lue 人について欧文で書かれた最初の研究であろう。さらにタイ研究としても、最近の最大の収穫だと思われる。

私はこれだけの業績をしあげられた Moerman 博士に心から敬意を表するとともに、いまさらながら東南アジア研究にかんするアメリカ側のいちじるしい発展に驚かされるのである。(本岡 武)

Ernest Mortensen and Ervin T. Bulland.
Handbook of Tropical and Sub-Tropical Horticulture. Washington: Department of State, Agency for International Development, 1964. 260 pp.

著者は AID に関係する前はいずれも農業教育に従事した人である。AID その他から熱帯亜熱帯地域に派遣されて豊富な経験をもつが、派遣地に東南アジアは一国も含まれていない。

本書は AID 関係や平和部隊として海外に出てゆく人のために書かれたもので、農業専門家でなくても理解が出来るように平易に書かれている。10章からなるが、主体は第2章の果樹およびその他の木本性作物と第3章のそ菜に関する章である。収録された果樹およびその他の木本性作物は71種で、そのなかにはカカオ、コーヒー、ココヤシ、アブラヤシ、ゴム、チャ、コシウ等の工芸作物が含まれている。そ菜は41種で、なかにゴマやリョクトウ、キャツサバ等が含まれているが、東南アジアの市場に多くみられるヘチマやトウガン、レイシ、ササゲ、エンサイ、コエンドロ、各種のアブラナ科のそ菜類等はなく、欧米人の好むどちらかといえば熱帯では高級そ菜に属するものが多い。書名が示すとおり便らんであるので各作物についての記述は極めて簡単であり、読んでいて興味がわいてくるというものではない。

深く学びたい場合は各作物のあとに挙げられている文献によって適当な本を探ることが出来る。農業指導者として熱帯や亜熱帯の低開発国にいった場合は、専門外のことでも本書に収録されている程度のことはいちおう理解しておく必要があるだろう。また熱帯農学を初めて学ぶには、一般に、概論から入ってゆくのであるが、この際沢山でてくるききなれない熱帯作物の数々を一つ一ついろいろの本を繰り広げて調べていては誠に不便であり、また各作物の記述があまりにも詳しいと本論の概論がいつこう進行しないことをしばしば経験するものであるが、このような場合にも本書は役立つだろう。ただ、東南アジアの農業に関係する者にとっては、もっと東南アジアに多い作物を取り入れてほしかったが、それは東南アジアを知らない著者達の経歴からみて無理からぬことであろう。(佐藤 孝)

歴史・文化・考古学文献出版委員会編『アユタヤ時代古記録集成 第1冊』 Bangkok, 1967. iii+118 pp.

คณะกรรมการจัดพิมพ์เอกสารทางประวัติศาสตร์วัฒนธรรมและโบราณคดี ประชุมจดหมายเหตุสมัยอยุธยา ภาค ๑

同委員会編『アユタヤ時代寺領・寺院奴隷寄進文集成 第1冊』 Bangkok, 1967. iv+84 pp.

ประชุมพระตำราบรมราชทูตเพื่อกัลปนาสมัยอยุธยา ภาค ๑

1767年に行なわれた、ビルマ軍のアユタヤ攻撃によって、アユタヤ時代の記録文書の大部分が散逸してしまったことは広く知られている。信憑性の高いタイ語史料の決定的不足は、アユタヤ史を志す歴史学徒の前に立ちはだかる高い壁である。こうした研究上の障害は、これまでもっばらヨーロッパ語および漢文史料の利用によって克服されようとしてきた。しかし一方、タイ国自体においても、戦火を免れたタイ語史料探索の努力が、まったくおぼろげにされていたわけではない。すでに前世紀の末葉以来、ダムロン親王ら歴史学者の手によって、細々ながら古

記録発掘の努力がつけられてきたのであった。ここに紹介しようとする2冊の書物は、「歴史・文化・考古学文献出版委員会」がこれまで断片的に発表されていたアユタヤ史料を総まとめにしようとする最初の試みとして評価したい。

『アユタヤ時代古記録集成・第1冊』には、長短とりまぜて34点の史料が収録されている。ここに「古記録」と訳したのはタイ語‘chotmaihet’である。この語の原義は「記録されたもの」の意であって、かなり広い外延をもつ語である。本書は目次も備わっておらず、編集上の不手際が目立つが、いちおう内容別に、外交・通商、宗教、行政、著作(kan taeng nangsu)の四つに分類され、それぞれについての史料が年代順に配列されている。時代的には1416年のパーリ語文書を最古層とし、1756年のタイ語銘文を最新層とする。史料の外部形式についてみると折本の本が8点、貴族および僧侶の昇叙を飾った金銀牌(lan thong・lan ngoen)が6点、寺院の門扉、パゴダの基底部、神像の台座などから収録した銘文が9点、その他11点となっている。

長文のものからあげると、まず「アユタヤ年代略記本」(1680)がある。これは俗にLuang Prasoet本と呼ばれるもので、すでに何度か上梓されているが、本書にはその原本の一部がはじめて写真版で示された。侍従職、警護職、宮内府など四つの役職の「心得書」(tamra)は、アユタヤ時代の中央行政機構を知る上に重要な文献であろう。また「ペットラーチャー王の八つの問」(1690)は、一種の教理問答であって、タイ人の仏教理解の一面を知り得て興味深い。ナライ王治下のアユタヤへ、ルイ14世の派遣したフランス使節ラ・ルベールにより締結された「暹仏協定」タイ語テキストと、2通の関係書簡、および1621年、テナセリムの地方役人がデンマークの商人に与えたものと考えられる交易許可証原文は、当時の対外交渉史料として重要である。各種の銘文のうちとりわけ興味があるのは、本書の冒頭に収められたルーイ県ダンサイ郡在のパゴダから収録された銘文で、1560年の日付をもち、アユタヤ王国と、チェンマイ王国との境界線画定の儀式執行に際し録されたものである。

本書に収録された史料は、いずれも原綴字に従っているが、このことは、本書が単に歴史学者にとっ

て重要な史料であるにとどまらず、言語史家にとっても、スコータイ碑文と三印法典(1805)の空隙を埋める資料として貴重なものとしている。

2冊目の「アユタヤ時代寺領・寺院奴隷寄進文集成」は、かつてタイ国芸術局紀要*Warasan Sinlapakon*に分載紹介されたものであるが、今回まとまった形で出版され、利用が便利になったことを喜ぶたい。文書の年代はユーカトッサロット王(1605~1610)およびブラベットラーチャー王(1688~1703)の治世と推定されている。寄進の対象となった寺院は、いずれも南タイ、パタルン県所在の寺院である。これまでほとんど手がけられていなかった寺領、寺院奴隷研究の一次史料としてきわめて重要な意義をもつものと言えよう。(石井 米雄)

メート・ラタナプラシット『北タイ方言辞典』Bangkok, 1965. xiv + 378 pp.

นายเมธ รัตนประสิทธิ์ พจนานุกรมไทยยวน-ไทย-อังกฤษ

タイ語北部方言(N. T.)の辞書・入門書の類は今までもかなり出版されているが、また一つ本書が加えられたわけである。全体は「導入」、「本文」、「中部タイ語(C. T.)単語の索引」、「植物名」および「C. T.の植物名索引」より成り、見出し語の数はだいたい4505であるが、その中には複合語、句、節なども含まれているから、実際には約3000語を有する辞書と見てよかろう。C. T.による索引が加えられているため、使用するのに非常に便利なものとなっている。また、英語の訳語は参考のために付せられた程度のもので、C. T.と同列には扱われていないが、意味の理解を確かなものとしてくれる。本書も、タイ人の手になる他の書物と同様、N. T.をC. T.文字により表記しているのであるが、その際、N. T.の音素体系を忠実に表わすためにどのような手段が用いられているかという点が問題となる。N. T.文字による表記はC. T.のそれと規則的に対応するので、大して問題はないのであるが、主だったものを次にあげてみる。

1) C. T.は5声調、N. T.は6声調を有する。N. T.における開音節あるいは閉鎖音以外の子音を末尾子音に有する音節における高平型、および閉鎖

音を末尾子音に有する短い音節における高昇型、この二つの声調類は C.T. 文字そのままでは表わすことができないため、本書ではこれら 2 者を「sǎŋ-thúm」と称し、それらを有する音節に下線をほどこすことにより表わしている。

2) N.T. における /n/ は C.T. にはないが、これは、/ñ/ を <ŋ/ > で、/j/ を <ɟ/ > で表わし分けており、問題とはならない。

3) C.T. では /w/ を伴う子音結合は /kw, khw/ しかないが N.T. ではその他の子音と /w/ との結合が存在する。本書では子音結合を <Cw- > で表わし、結合せずに 2 音節になるものを <CVw- > で表わしている。例えば、/swaam/ と /sawád/ などである。

これらの点を理解しておけば、本書の C.T. 文字による表記から音素表記に変えることは問題がないであろう。他の辞典の多くにおいては、子音、母音の相異に関する説明はなされているが、声調類についての正確な説明を欠いている。この点で本書は他の書よりも詳細だと言えよう。本書における N.T. は、子音、母音および声調類の組織から見て、チェンマイの方言、あるいはそれに最も近い方言と認められる。また集められた語彙の中には、現在では C.T. の語彙に取って代わられて、かなりの年寄りで田舎に住んでいる人でなければ覚えていないような語彙が多く含まれている。(桂 満希郎)

Sylvia J. Lombard (compiled) and Herbert Purnell (edited). *Yao-English Dictionary*. Linguistics Series II, Data Paper No. 69, Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University, Ithaca, 1968. 363+xiv pp.

ヤオ語に限らず東南アジアの少数民族の言語に関する資料というのは非常にとぼしいのであるが、近年各国の研究者による調査が盛んになり、その結果報告が出始めてきた。本書もそれらの一つとして非常に意義深いものと言えよう。著者は主として北部タイにおいて、1952年より1962年にわたってヤオ族と接触を保ち、その時に収集した言語資料の一部を整理し、辞書としたのが本書である。今までに行な

われたヤオ語の研究報告は極めて少なく、辞書としては、本書が F.M. Savina, "Dictionnaire Frafais-Man," *BEFEO* 26:1-225, 1926 につぐ第 2 冊目である。Savina が主として北ベトナムにおける Kim-di ヤオ語を扱っているのに対し、本書はタイ国北部、ラオスに分布する Lu Mien ヤオ語を対象としており、見出し語だけで 3234 語、その他をも含めて合計すると 11,000 語(句)を有する。この種の言語に関するパイオニア的報告としてはかなり大きなものになっている。Lu Mien ヤオ語と言うのは Savina の Kim-di ヤオ語よりも、G. B. Downer, "Phonology of the Word in Highland Yao," *BSOAS* 24: 531-541, 1961 における Tai-pan ヤオ語により近いものである。

本書における表記法は、宣教師 E. J. C. Cox により考案され、1954 年ごろから北部タイ国で用いられてきたローマ字表記であり、Savina, Downer の仕事により知ることのできるベトナム語のローマ字表記に改良を加えたものとはかなり違っている。純粋な音素表記ではないが、非常に高度に言語の音素体系を反映していることは、本書に付せられた音素体系との対照表を見てもわかる。しかし、あまりにもタイプライター使用上の便宜とか、その他の実用的な便利さを重視したためか、例えば、/ŋ/ を <v > で表記するなど、通常の音素記号に対する概念からかけ離れた表記が多いため、本書を自由に使いこなすためには、この表記法にかなりよく慣れる必要があるだろう。声調は音節の直後に付せられた文字により表わされている。この辞書の表記方法にもとづいて、音素体系を考えること、あるいはここに集められた資料を音素表記にもどして、それぞれの目的に応じて使用することは出来るのであるが、ただ声調類の変化に関する説明が少なすぎ、Suprasegmental phonemes についての説明がないために、この辞書のみから言語構造を完全に知ることができないのは残念である。例文は豊富であり、著者のヤオ語に関する深い知識と能力とを示している。なお、本書は本文の他に、Appendix A—E が加えられており、それぞれ、数詞、親族語彙、命名法、諺および慣用句、類別詞に関して有用な説明が成されている。研究のため、また実目的のためにも、役に立つ資料と言えよう。(桂 満希郎)